



TITLE:

社会理念とイデオロギー、ウトピー及びミートス(二・完)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 社会理念とイデオロギー、ウトピー及びミートス(二・完). 経済論叢 1932, 34(5): 721-744

ISSUE DATE:

1932-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130180>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第五號

第三十四卷

昭和七年五月一日發行

論 叢

相續稅重課の大勢と其方法 法學博士 神戸 正雄
貨幣の價値の受動性 文學博士 高田 保馬
社會理念とイデオロギー及びミートス 文學博士 米田 庄太郎

研 究

了解科學としての經濟學 法學士 山口 正太郎
支那國民經濟序説 經濟學士 大上 末廣
取引所組織の再吟味 經濟學士 今西 庄次郎
燒津經漁業に於ける船仲組織 經濟學士 岡本 清造

説 苑

福岡藩の育子策について 經濟學博士 本庄 榮治郎
貸借對照表分析の前提條件 經濟學士 小菅 敏郎
連鎖店反對運動 經濟學士 谷口 吉彦

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

社會理念とイデオロギー、ウトピー及び

ミートス (二・完)

米田 庄太郎

五、マンハイムのイデオロギー概念論

私は本論文前々節に於てイデオロギー概念の由來を論究して、此の概念が始めて構成された時には如何なる意味に用ひられて居たか、又其の後如何に種々なる意味に用ひられて來たかを簡單に説述したが、併し今日社會學或は社會哲學及び哲學一般に於て大に重要視されて來たイデオロギー論 (Ideologienlehre) のイデオロギー概念は、直接にはマルクス主義のイデオロギー概念から發達せるものであると考へるから、本論文前節に於ては特にマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念を稍々詳しく論究したのである。そうして是れより先づマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論が、如何なる意味にて最近のイデオロギー論及び知識社會學の發達の基礎となつて居るか、其の發達に於て如何に重大なる意義を有するかを明かにすると同時に、最近のイデオロギー論及び知識社會學は、如何にマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論を乗り越へて、彼等のま

だ注目しなかつた深奥廣大な意義を發揮せんとするものであるかを明かにし、それより其の最新のイデオロギー概念と比較しつつ、私の社會理念の論理的本質を究明せんとするのである。然るに私はマンハイムのイデオロギー論及び知識社會學に關する諸著作は、右の二點を明かにする爲めに最と有益なるものと考へるから、此處に先づ右の二點に關する彼の研究の大要を述べて置きたいと思ふ。

但し私は早くより知識社會學の重要を認め、既に大正五年(千九百十六年)「哲學研究」(同年十月號)に於て「社會學的認識論」と題する一論文を公にして居たのである。併し其後は他の諸問題の研究に時間をとられ、特に知識社會學の研究に力を注ぐことが出来なかつたが、京大經濟學部本年度の社會學講義「知識社會學の發達と批判」に於ては、知識社會學を其の發達に於て批判的に論究せんとするので、其の中にマンハイムの知識社會學をも批判的に評價したいと思ふ。

今マンハイムは先づイデオロギー概念を相互に區別し得られる二つの根本的意味に従ふて、根本的に二種に大別して居る。其の一は彼が特稱的イデオロギー概念(*der partikuläre Ideologiebegriff*)と稱するものにして、其の二は全體的イデオロギー概念(*der totale Ideologiebegriff*)と稱するものである。

反對者の一定の觀念及び表象は、一定の事態の眞實なる知識は彼の利益とならないが爲めに、彼が大なり小なり之を隱蔽して作れるものであると考へるが故に、人々が反對者の其等の觀念及び表象をイデオロギーと呼ぶ場合には、其のイデオロギー概念は特稱的イデオロギー概念と稱せらる可きものである。そうして此の際イデオロギー概念は意識的虚言から半意識的本能的隱蔽に至るまでの、又他人を欺瞞することから己れ自身を欺瞞することに至るまでの全諸階段を包含する。虚言の單純なる概念から甚だ徐々に浮び上つた此のイデオロギー概念は、特稱的と云ふ語の種々なる意味にて特稱的である。そう

1) Karl Mannheim, Strukturanalyse der Erkenntnistheorie, Ergänzungband der Kant-Studien, Nr. 57, 1922.
Zum Problem einer Klassifikation der Wissenschaften. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 1922.
Beiträge zur Theorie der Weltanschauungsinterpretation, Jahrbuch für Kunstgeschichte. Bd. I. 1921/22.

して其の特稱性は吾人が之を全體的イデオロギー概念と稱せんとするものに對立させて考へる時に、直ちに認知される。要するに吾人は一の時代のイデオロギーとか、又は一の歴史的社會的に具體的に規定されたる團體、例へば一の社會階級の如きもの、イデオロギーとか云ふ場合には、夫れはつまり其の時代或は其の團體の全意識構造の特有性及び本有狀態を表現するものであると解し得る。そうしてかゝる意味に解されたるイデオロギー概念が、即ち吾々が全體的イデオロギー概念と云はんとするものである。

マンハイムは先づ右に述べしが如くに、特稱的イデオロギー概念と全體的イデオロギー概念との差別を一般的に指示したる後、兩者の共同性と最も重大なる差異とを論究して居るが、此處に其の所説を簡単に述べて置く。

特稱的イデオロギー概念と全體的イデオロギー概念との共同性、兩者共に考へられたる内容(反對者の觀念或は理念)を、言述されて居るものに直接了解的に沈み込むことによりて把握せんとするのではなく、其等の觀念或は理念を言述する其の集團的或は個人的主體の、又吾人が其等の觀念或は理念を、夫れの存在狀態或は存在狀況に於て函數化(funktionalisieren)する其の集團的或は個人的主體の了解を通じて、間接的に或は遠廻はりして把握せんとするのである。但し「主體の存在狀態に於て其等の觀念を函數化する」と云ふは、つまり吾人が其等の觀念を主體の存在狀態の函數として解釋することによりて、一定の、問題となる意見、確認、客觀化(言葉の最廣義に解されたる「觀念或は理念」としての其等の觀念が夫れ自身から把握されるのでなく、主體の存在狀態から把握されると云ふことを意味せんとするのである。尙ほ夫れは更に主體の具體的構造、存在狀態は主體の意見、確認及び認識を構成することに協力する一因素としての意義を有するものであると見ること、意味するのである。

かくて二種のイデオロギー概念は、右に述べしが如き仕方にて、所謂觀念或は理念を夫れの運載者及び其の運載者の社會的空間に於ける具體的狀態に於て、函數化するのである。

特稱的イデオロギー概念と全體的イデオロギー概念との最重要なる差異 (1)特稱的イデオロギー概念は只反對者の主張の一部分(夫れも只其の内容性に於てのみ)をイデオロギーと認めんとするのであるが、全體的イデオロギー

Historizismus. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 1924.

Das Problem einer Soziologie des Wissens, Ebd. 1925.

Ideologische und Soziologische Interpretation der Geistigen Gebilde, Jahrbuch für Soziologie. Bd. II: 1626.

Das konservative Denken. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. 1927.

「概念は反對者の全世界觀(範疇的裝置をも含めて)を問題とし、更に其等の諸範疇をも集團的主體から了解せんとするのである。

(2)特稱的イデオロギー概念にありては、函數化は只心理學的平面に於て行はれるだけである。人々が反對者の此の又はかの主張は虚偽である、彼は彼れ自身に或は他人に一の事態を隱蔽して居ると云ふ場合には、精神學的(Zoologisch)妥當平面に關しては、尙ほ常に彼と同じ地盤の上に立つて居る。かくて此處では虚偽はまだ心理學的に曝露し得られ、欺瞞の根元はまだ心理學的に指摘し得られるので、結局イデオロギー的疑ひはまだ根本的ではない。然るに全體的イデオロギー概念にありては、大に異なつて居る。

人々が例へば一定の時代は一の觀念世界に生活し、吾々は他の觀念世界に生活して居るとか、又は一定の歴史的具體的社會層は吾々とは異なる範疇に於て思惟するとか云ふ場合には、人々は只個々の思想内容を意味して居るだけでなく、更に一定の思想體系全體、體驗及び解釋の形式の一定の種類を意味して居るのである。此處では人々が内容及び眺め方と共に形式をも、結局は範疇的裝置をも一の存在状態に結び附けて解せんとするだけ、夫れだけまさしく精神學的平面が函數化されて居る。要するに特稱的イデオロギー概念にありては函數化は單なる心理學的平面に於て行はれて居るのであるが、全體的イデオロギー概念にありては精神學的平面の函數化が行はれて居るのである。

(3)右の差異に應じて特稱的イデオロギー概念は主として一の利益心理學(Intereessenpsychologie)によりて作用し、之れに反して全體的イデオロギー概念は大に形式化されたる、又出來可くは客觀的構造聯結を志向する函數概念によりて作用する。人々は特稱的イデオロギー概念にありては、この又はかの利益が因果的に其の虚言或は隱蔽を強制して居ることを前定するが、全體的イデオロギー概念にありてはこの又はかの陣營(存在状態)はこの又はかの見方、考へ方、眺め方に相應して居ると考へるのである。もつとも全體的イデオロギー概念にありても、利益陣營(状態)の分析が屢々行はれる。併し夫れは因果的決定因素の一を發見するが爲めではなく、其の陣營の構造を特質附ける爲めである。かくて此處では利益心理學は、存在状態と認識的形成との間に存立する構造分析的或は形態學的形態對應によりて、本來とり代はられるであらう。特稱的イデオロギー概念は根本的には決して心理化する平面を去らないが故に、此處で吾人が總てのものを結び附ける主體は個人である夫れは人々が團體に就て論ずる時も同様である。と云ふのは心理的經過は只各個人に於て個人的心意の中に行はれるだけのものであるからである。そうして此の際人々は屢々團體イデオロギーと云ふ語を用ひるが、併しかゝる場合に云ふ團體存在

Das Problem der Generation, Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie 1928.
Die Bedeutung der Konkurrenz im Gebiete des Geistigen, Verhandlungen
des 6. Deutschen Soziologentages, 1929.
Ideologie und Utopie, 1929.
Zur Problematik der Soziologie in Deutschland, Neue Schweizer Rundschau,
1929.

とは只、同じ團體の中に共存する諸個人は、同じ社會的陣營を土臺としての直接的反動に於てか、又は直接な心理的相互影響の結果としてか、同様に反應すると云ふことを意味するだけである。要するに吾人は體驗作用を以てイデオロギー構成の唯一の場所と考へる限りは、個人を何れの集團の方向に於ても超越させることは出来ない。吾人はあるがまゝの個人を只精神學的平面に於てのみ、一の集團的主體の方向に超越させることが出来るのである。心理學的平面に固着する總てのイデオロギー研究は、最善の場合に於ても只集團心理學の層を把むのである。之れに反して全體のイデオロギー概念を用ひて研究し、かくて諸聯結を精神學的範域に於て函數化する人は、心理學的、現實的主體に於て函數化するのではなく、一の歸屬主體(ein Zurechnungssubjekt)に於て函數化するであらう。

右に述べしが如きマンハイムのイデオロギー概念の根本的區別、即ち特稱的イデオロギー概念と、全體的イデオロギー概念との區別から考へると、今日社會學或は社會哲學及び哲學一般に於て大に重要視されて居るイデオロギーの概念は、つまりマンハイムの云ふ全體的イデオロギー概念であること、及び今日のイデオロギー論の發達に於て、マルクス主義のイデオロギー概念が重大なる意義を有するのは、つまり全體的イデオロギーとしてのイデオロギー概念は、マルクス及びエンゲルスによりて始めて先づ大體上、完成されたが爲めであることが覺られるのである。そうして私は其の點を明かにする爲めに、ヤハリ全體的イデオロギー概念の由來及び發達に關するマンハイムの所說の大要を述べて置きたいと思ふ。

マンハイムの論ずる處にすれば、全體的イデオロギー概念の最初の不完全なる形態として先づ最も重要視す可きは、意識哲學によりて構成されたる世界形象(das Weltbild)である。

意識は一の統一體にして、夫れの諸要素は組織的に結合するものであると云ふ根本思想に於て、意識哲學は吾人の外に存在

し、常に益々見渡し難くなり、無限の多様に分裂する世界の代りに、己れの自發性に於て己れ自身から産出する主觀の統一性によりて、夫れの組織的結合が保證される世界體驗を吾人に與へた。要するに世界形象の客觀的本體論的統一性が破壊されたる後、哲學者は先づ之を主觀の方面から救ひ出さんとし、此處に中世紀的基督教的な客觀的世界統一性にとり代へて、啓蒙哲學の絶對化されたる主觀統一性、即ち「意識一般」が強調されて來たのである。かくて夫れより世界は只一の主觀に世界として結び附けられることによりてのみ存在するものとなり、此の主觀の意識活動が世界形象を構成するものと考へられるに至つたのである。そうして吾々は其の世界形象を先づ大體上全體的イデオロギー概念と見做すことが出来る。嚴密に云へば吾々は其處にまだ非歴史的及び非社會學的に考へられて居る不完全なる全體的イデオロギー概念の姿を認めることが出来る。併しとにかく意識哲學の世界形象は既に構造統一體にして純粹なる多様性でなく、只具體的主觀に結び附けられて居るだけでなくして、假設された一の「意識一般」に結び附けられて居り、更にカントにありては其の世界形象に於て精神學的平面が心理學的平面から切り離されて強調されて居る。何れにしても世界を吾人から獨立して、夫れ自身で確定的に存在するものと見る本體論的獨斷主義の最初の融解は、意識哲學によりて成就されたのである。

意識哲學の世界形象は右に述べしが如き意味にて、先づ大體上全體的イデオロギー概念と認め得られるが、しかも夫れは非歴史的及び非社會學的に構成されたのであるから、甚だ不完全なる全體的イデオロギー概念であると云はねばならぬ。併しそれと同時に、其の世界形象が全體的イデオロギー概念として完成される可き方針は、明かに了解される。即ち其の世界形象は先づ歴史化され、更に社會學化されねばならないのである。そうして先づ其の歴史化は歴史派及びヘーゲルによりて成就されたので、かくて吾人は意識哲學の世界形象を以て、完全なる全體的イデオロギー概念への第一歩と見做せば、歴史派及びヘーゲルの仕事は其の第二歩として認めらる可きである。

歴史派及びヘーゲルは意識哲學の所説に、意識の統一性は歴史的生成の中に變化變形する統一性であると云ふ、重要な思想を附加した。そうして意識統一性の運載者としての主觀は、意識哲學に於ては全く抽象的な、超時間的な、超社會的な

統一體即ち「意識一般」であつたが、今や歴史派及びヘーゲルにありては、民族精神が歴史的に分化する意識諸統一體の代表者となり、其の充實されたるより高等なる統一體は世界精神として考へられた。此處に注目すべきは、哲學的見方が益々具體的になるのは、つまり生活を政治的歴史的に取扱ふことによりて獲得される新しき思想財を、益々豊富に其の中にとり入れることによりてである云ふことである。そうして只此の如くにしてのみ、始め生きた生活に於ける直接の所與として現はれて居た或物が、遂に終極まで考へつめられ、夫れの中に潜在する諸前定にまで追求されるに至るのである。要するに革命的・非歴史的思惟に對して勃興せる反動は、生活的關心及び歴史的なるものゝ深められたる體驗への衝動を大に活動せしめ、そうして哲學は此の現實なる傾向をとり入れることによりて、世界形象の一般的人間的、抽象的運載者を遂かに具體的な主觀、國民的に分化されたる「民族精神」に轉化させたのである。

右に述べし如く意識哲學の意識一般が、歴史派及びヘーゲルによりて先づ歴史化されたことによりて、此處に近代的な全體的イデオロギー概念の完成が一段進められた。併し其の完全なる完成の爲めには、更に夫れは上に述べし如く社會學化されねばならぬ。即ち社會學的に考察されねばならぬ。そうして此の仕事を成就せるものはマルクス及びエンゲルスである。それで吾々はマルクス及びエンゲルスのイデオロギー概念を以て、近代的な全體的イデオロギー概念を始めて大體上完成せるものと、見做すことが出来る。

さきに述べし如く、世界形象の一般的人間的、抽象的運載者から、即ち意識一般から、遙かに具體的な主觀、國民的に分化されたる民族精神への變動は、本來又結局は哲學及び精神史に於て生起せるものでなく、此の變動は哲學及び精神史に於ては既に一般的世界觀的媒體に於ける變動を表現するものに外ならなかつた。即ち其の變動はナポレオン戰爭中又其の後生起せる感情變動、即ち民族感覺を始めて現實に產出せる其の感情變動に、明らかに相應して生起せるものである。そうして全く同様な理由によりて、此處に歴史的社會的運動から、近代的な全體的イデオロギー概念が生まれて來たのである。要するに今や歴史化されたる意識の運載者は、最早民族或は國民ではなく、階級となつて來たから、此處に社會的及び政治的運

動からして、社會體の構造も亦夫れに屬する精神的聯結もつまりは社會的緊張の方向に於て分化すると云ふ洞見が生まれ來り、階級意識の概念、一層正しく云はゞ階級イデオロギーの概念が、民族精神概念にとり代はるに至つたのである。そうして夫れによりて思想發達は二重の運動を成就した。即ち思想發達は一方に於ては總合化する集中過程を遂行して、其の過程に於て世界の無限的多樣性が意識概念によりて一の統一的中心を獲得し、他方に於ては總合運動に於て全然構成的に設定された統一を絶へず弛めること、及び益々彈力性を有するものに化成することに、益々進んだのである。今右の二重運動の結果として、此處に超時間的な、恒定不變なる意識一般の假設的統一性、靜的統一性から、歴史的時代に從ひ、國民及び社會層に從ふて分化された主觀或は主體が益々明白に現はれて來た。此の際にも尙ほ意識の統一性は固持されて居るが、併し其の統一性は今や動的な統一性、生成統一性となつて居る。かくて人々は此の意識觀に基いて、歴史的現實態を、夫れに於ては何れの方面から見ても證示さる可き統一性は只一の動的な、絶へず自から變化する統一性であり得るだけであるとして、觀察することを學び、此處に意味諸要素の連續的及び組織的結合的變化が主題となつて來た。そうして此の如き見方の發達に關しては、ヘーゲルの功績は大なるものであるが、しかも彼は本來此の見方を思辨的に發展させたが故に正當でないことが覺られ、かくて今や吾々は始めて哲學者によりて發見された此の構成的思想を、經驗的研究に轉化する發達階段に到達したのである。

併し此處に吾々にとつて決定的に重要なのは、さきに區別して叙述したが、併し實際に於ては一の共同的な歴史的事情によりて可能となれるイデオロギー概念の二つの流れが、外部的にも益々相接近したと云ふこと、つまり特稱的イデオロギー概念が全體的イデオロギー概念と結び附て來たと云ふことである。卒直な觀察者は此の事を左の事實に於て認知するであらう。即ち以前には人々は一定の社會的地位の代表者としての反對者に對して、彼はまさしくかゝる代表者として、一々の場合に意識的或は無意識的偽造を行なふて居ると云ふ非難を加へたが、今や人々は反對者の意識構造を其の全體に於て信用しないが故に、正しき思惟の可能性を彼に於て全く認めないと云ふことによりて、攻撃が大に深められて來たことである。そうして此の單純なる觀察は、構造的意味に於て分析すると、つまり人々は以前には社會的に拘束されて居る欺瞞根元を證示することによりて、只心理學的平面に於て反對者の言述の虛偽性を曝露するだけに止まつて居たが、今や精神學的平面をも攻撃範圍内にとり入れ、反對者の言述の精神學的平面をも、社會的函數化によりて其の妥當力を破壊せんとし、かくて破壊は根本まで推し進められたことを意味するのである。併し夫れによりて此處に、意識史的過程に於ける新しき階段が現はれて來

た。即ち「誤れる意識」の可能性 (die Möglichkeit eines „falschen Bewusstseins“) の問題が新しき意味を獲得し、そうして夫れによりて全體的イデオロギー概念が特殊な深みを與へられて來たのである。

要するにマルクス主義のイデオロギー概念に於て、始めて特稱的イデオロギー概念が全體的イデオロギー概念と結び附けられ、階級利益説が益々徹底的に築き上げられ、又ヘーゲル哲學的根元からして單なる心理學的平面が全體的イデオロギー概念の方向に於て克服されて、問題は精神學的平面に推し移され、此處に「誤れる意識」の可能性説が新しき意味を獲得し、そうして、思想財に於て單にイデオロギー的なものと現實性に結び附いて居るものとを判別する決定的審判者として、經濟主義の外に政治的實踐の重要性が認められて來たのである。かくて一時イデオロギー思想はマルクス主義の特有物の如く考へられて居たのは、敢て怪しむに足らぬ。併し今やかゝる時代は既に乗り越へられた。イデオロギー問題は一黨派の獨占物となるにはあまりに普遍的な、あまりに根本的なものであることが觀破され、總ての陣營に於て、反對者の思想を其のイデオロギー性に於て批判し、排斥せんとする方法が採用されるに至り、マルクス主義自身も其のイデオロギー性に於て分析されることになつた。かくて今や吾々はイデオロギー論に於て更に新しき階段に達した。そうして獨逸に於て此の新しき階段を開始した最も重要な人々は、マックス・ウエバー、ゾムバールト、トレールチ等の人々である。

マンハイムは右に述べし如くに、イデオロギー思想が一般的に擴大された事によりて、此處に根本的に一の新しき意識狀態が現はれ來り、イデオロギーと云ふ語は全く新しき或物を意味し、又夫れに附着する「誤れる意識」の問題、現實的なものゝ問題、其他の問題等も新しき意味を賦與され、そうして徹底的に推し究めて行くと、吾人の公理論、吾人の存在論及び認識論も、根本的に變化せざるを得ないと考へるのであるが、此處では只彼の所論の一般的筋書を述べるに止める。

マンハイムは先づイデオロギー概念が一般的に擴大された結果として、全體的イデオロギー概念は根本的に特殊的全體的イデオロギー概念(即ち自分の思惟立場は問題とならない絶對的なものと獨斷し、そうして總ての反對的思惟立場をイデオロギー的と見るもの)と、一般的全體的イデオロギー概念(即ち常に反對者の立場のみならず、根本的には總ての立場、隨ふて自分自身の立場もイデオロギー的であると見るもの、或は人間的思惟は總ての黨派學派に於て、又總ての時代に於てイデオ

ロギー的であるとするもの）とに大別されてくると考へ、そうして其の一般的全體的イデオロギー概念の發達によりて、此處に單なるイデオロギー論から知識社會學が生まれて來たと見るのである。

マンハイムは右に述べしが如くにして、此處にイデオロギー論から知識社會學が生れたと考へるのであるが、然らば彼はかくして生まれたと見る知識社會學は、根本的には如何なる任務を果さんとするものかと考へるのであるか。彼の論ずる處によれば、知識社會學は先づイデオロギー研究に於て、只反對者の思想の非現實的なことを曝露せんとするだけの志向を放棄して、「思惟の存在被拘束性」(die Seinsgebundenheit, die Seinsverbundenheit)の原理、即ち總ての思惟は存在に拘束されて居ると云ふ原理を樹立し、そうして先づ總ての場合に於て社會的存在狀態と見方(眺め方)との聯結を價值無關係的(vertheil)に究明せんとし、次には此の價值無關係的態度を一の認識論的態度と結び附けて、真理問題の研究を行なはんとするものである。但し此の際知識社會學が結び附ける認識論は、相對主義か又は關係主義(Relationismus)かの何れかであり得るが、併し嚴密に推究して行けば、相對主義を排して關係主義を承認せねばならぬ。

マンハイムは知識社會學の任務を、根本的には右に述べしが如きものと認め、それより先づ一般的全體的イデオロギー概念を、價值無關係的なものと評價的(認識論的形而上學的)に方向付けられたるものとの二典型に分つて考察し、價值無關係的な一般的全體的イデオロギー概念が、結局は自から評價的(認識論的形而上學的)に方向付けられたる一般的全體的イデオロギー概念に滑

る世界觀的形而上學的決斷或は二つの典型的存在的決斷 (die zwei typisch ontischen Entscheidungen) を考察して、社會學的時代診斷學 (soziologische Zeitdiagnostik) を論究し、夫れに結び附けて「誤れる意識」及び夫れの產物としてのイデオロギー概念の新しい意味を究明し、終りにイデオロギー思想及びウトビー思想に於ては、つまりは非現實性の曝露ではなく、現實性の探究が目標である可き所以を論じて居る。併し私は此處では主としてマンハイムのイデオロギー概念を考察せんとするのであるから、只彼が「誤れる意識」及び夫れの產物としてのイデオロギーの新しい意味として論述して居ることの大要を左に述べるに止める。

マンハイムの論ずる處によれば、一切の規範及び價値の時代的及び社會的被拘束性が承認される以上、吾人は一時代の何れの設定をも單純に絶對的なものとして受諾することが出来ないが、併し同じ時代の諸般の規範、考へ方、方針等の間に、真なるものと真ならぬものとを區別せんとするであらう。そうして此處では、關係主義に従ふて考へる以上、「誤れる意識」は一の絶對的な永久不變な存在に對して成立するものではなく、絶へず新しい精神的過程に於て自から新たに形成する存在に對して成立するものとして解されるのである。かくて例へば倫理的なるものにありては、一の意識が與へられたる存在階段に於て、最善の意志を以てするも尙ほ正當に行爲し得ない様な規範に準じて行爲するならば、隨ふて個人の過失は個人的過失として非難さる可きものでなく、誤れる倫理的公理によりて基礎附けられ、強制されたものとして把握される場合には、其の意識は誤れる意識である。又精神的自己解釋に於て、一の意識が夫れが生き込んで居る意味給附 (生活諸形式、體驗諸形式、世界觀及び人間觀) によりて、新しい仕方の精神的反動及び人間生成一般を隱蔽し妨害するならば、其の意識は誤れる意識である。又一の理論的意識が與へられたる存在階段に於て、實際的生活上矛盾なしには思惟し得ない様な範疇に於て思惟するならば、其の意識は誤れる意識である。

今總て其等の場合を包括して考へると、誤れる意識は全く新しき相貌を呈することが學ばれる。要するに夫れの方角附けの仕方にて新しき現實態をとり入れず、かくて新しき現實態を既に乗り越された舊範疇で隱蔽する意識は、誤れる又イデオロギー的な意識である。そうして吾々はかゝるイデオロギー概念を評價的及び動的イデオロギー概念と稱したいと思ふ。是れ此のイデオロギー概念は思想内容及び意識構造の現實性に關して決斷を行なふが故に評價的であり、又其等の決斷を絶へず流動する現實態に即して行なふが故に動的であるからである。

此のイデオロギー概念はまさしく只、單なる欺瞞根元以上に、「誤れる意識」構造が存立すると云ふ洞見を前定するだけのものにして、そうして左の諸事實に基いて構成されたものである。即ち此處に云ふ「現實態」は一の動的なものであり得ること、同じ歴史的社會的空間の中に種々に陣取られたる「誤れる意識」構造の存在し得ること、「同代的存在」を思惟に於て乗り越へて居る意識構造も、亦其の存在に達しない意識構造も存在するが、兩者何れも其の存在を隱蔽するものであること等の諸事實である。尙ほ此のイデオロギー概念は最後に只實踐に於てのみ啓示される一の「現實態」を取扱ふのである。そうして此の動的及び評價的イデオロギー概念中に包含されて居る總て其等の諸事項は、人々は避けることが出来ないで、精々組織的に絶へず種々異なる仕方にて加工し得るだけの經驗に、基因するものである。

却説私は以上述べ來れるマンハイムの所説によりて、本節の始めに舉げし二點或は二問題、(即ちマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論は如何なる意味にて、最近のイデオロギー論及び知識社會學の發達上重大なる意義を有すると認めらる可きかと云ふ點或は問題、及び最近のイデオロギー論及び知識社會學は如何にマルクス及びエンゲルスのイデオロギー論を乗り越へて、彼等のまだ注目しなかつた深奥廣大な意義を發揮せんとするかと云ふ點或は問題)を究明せんとしたのであるが、夫れによりて先づマルクスのイデオロギー論はマンハイムが全體的イデオロギー概念と稱するものを、始めて大體上完成したものにして、又夫れに含まれて居る「誤れる意識」の概念

に新しき意味を賦與せるものであるが故に、最近のイデオロギー論及び知識社會學の發達上重大なる意義を有するものなるを明かにし、次に最近のイデオロギー論及び知識社會學は根本的には、マンハイムの云ふが如き特殊的全體的イデオロギー概念を、一般的全體的イデオロギー概念に發達させることによりて、マルクスのイデオロギー論を乗り越へ、そうして一方に於ては思惟の存在被拘束性の原理を確立し、夫れに伴なふて動的存在論及び關係主義認識論(但しマンハイムは相對主義かとして關係主義を主張して居るが、私の見る處によれば彼の關係主義と稱するものは、普通の相對主義とは異なつて居るが、しかもジムメル自身はやはり相對主義と稱して居た其の相對主義に歸着するもの、又そう考へることによりて、マンハイムの主張する主旨は最ともよく實に現されるものと思はれる。)を發展させ、他方に於ては「誤れる意識」の概念及びイデオロギー概念に更に新しき深い廣い意味を與へたことを明かにしたと思ふ。然るに此處に私が特に注目したいと思ふのは、本論文前節「マルクス及びエンゲルスのイデオロギー論」中に、私が立てた彼等の純理論的イデオロギー概念と實際的或は政治論的イデオロギー概念(但し私は此の名稱はあまり適切なものとは思はに此の名稱を用ひて居る。)との區別である。要するに私の立てた右の區別によると、マンハイムがマルクスのイデオロギー概念として大に重要視して居るものは、つまり私がマルクスの實際的或は政治論的イデオロギー概念と稱するものに當り、そして彼が知識社會學の根本原理と認めんとするものは、つまり私がマルクスの純理論的イデオロギー概念と稱するものに、改造を加へたるものに外ならないと思はれる。と云ふのは前節中に述べし如く、私がマルクスの純理論的イデオロギー概念と稱するものは、つまり社會的存在によりて規定されたる意識の產物を意味するものであるからで

ある。但しマルクスは其の社會的存在を、結局經濟的存在と見る偏狹な意味に解したのであるが、マンハイム及び其の他の今日の知識社會學者は一般に思惟を拘束する存在は精神性をも具有するものと見て、否な其の精神性を大に強調して、一層廣大深奥な見解を立て、居ると思はれるのである。

今私はマンハイムの所説によりて上文に示せる最近のイデオロギー論は、私の社會理念の論理的本質を究明せんとするに當つて、先づ注目す可きものと認め、かくてマンハイムのイデオロギー論を中心として考察し、之れと他の諸家のイデオロギー論とを比較しつゝ、最近のイデオロギー論一般を批判して、以て私の社會理念の論理的本質を究明せんとするのであるが、併し私の社會理念の論理的本質を究明せんとするに當つて、更に一層直接に重要な意義を有するものは、マンハイムが上に述べし如くに新しきイデオロギー概念を論述したる後、之れと區別して詳しく論究して居るウトビー概念及びウトビー的意識論である。それで次節に於て更に之を考察することとする。

六、マンハイムのウトビー的意識論

マンハイムは先づ具體的に現實に存在し、事實上自から形成する當面の社會的存在秩序に相應する表象と、其の社會的存在秩序を超越する表象 (seinstranszendente Vorstellungen) とを區別し、

前者を充當的、存在合致的表象、後者を不充當的、存在不合致的表象、即ち存在超越的表象と稱して居る。そうして其の存在超越的表象を更にイデオロギーとウトビーとに區別せんとするのである。

マンハイムの論ずる處によれば、存在超越的表象の中にて、事實上決して夫れの中に表象されて居る内實の實現に到達しないものがある。かゝる存在超越的表象を吾々はイデオロギーと稱する。そうしてイデオロギーによりて決定されたる行爲が、表象されて居る内實から外づれる形式は種々相異り得るので、夫れに對應して此處にイデオロギー意識の可能的諸典型が區別される。

イデオロギー意識の第一典型は、表象し思惟する主觀の歴史的及び社會的に規定されたる思惟の全公理論が、根本的に其主觀の表象と現實態との不合致を覺らせない様に設陣されて居るが故に、其主觀が其の不合致を發見し得ない場合に見出される。そうして此の第一典型に對して、吾々は「キャンント意識」(Cant-Bewusstsein)を第二典型と見做すことが出来る。但し「キャンント意識」は自分の觀念と行爲との不合致を發見する可能性を歴史的には有して居るが、併し生活的本能から之を隠蔽することを特質とするものである。(キャンントは英語で、信心ぶるとか、何々ぶるとか云ふ、ぶることを意味するものであるから、キャンント意識は「ぶる意識」とでも譯す可きか。)終りに第三典型として認めらる可きは、意識的欺瞞に基因するイデオロギー意識にして、此處ではイデオロギーは意識的虚言の意味に解さる可く、又夫れは自己欺瞞ではなく、他人欺瞞を意味するのである。尙ほ第一典型から第二典型を越へて第三典型に至るまでに、吾人は無數の階段を區別することが出来る。

ウトビーはイデオロギーと同じく存在超越的表象であるが、併し夫れは現存する歴史的な存在現實態を、反抗運動によりて自分の表象の方向に變化させ得ると云ふことに於て、イデオロギーから根本的に區別される。此の區別は形式的には明瞭であるがしかも實際上具體の場合に於て兩者を區別することは困難である。此の際には吾人は一の評價し測定する表象を取扱ふのであるから、夫れを完全に把握するには歴史的現實態の支配を争ふ夫れ夫れの黨派の意慾及び生活感情に、不可避的に參加せねばならぬ。尙ほ與へられたる場合に於て、存在超越的表象をイデオロギーと認む可きか、又はウトビーと認む可きかは、本質的には、又吾人が存在現實態の何れの階段に尺度を据へるかによりて定まる。そうして現存の社會的精神的存在秩序を代表する社會層は己れによりて運載される諸聯結を現實的なるものとして體驗するであらうが、之れに反して反對の立場にある社會層は己れによりて意欲され又己れによりて生成しつゝある生活秩序の傾向的胎芽に従ふて、既に其の進路を

定めるであらうと云ふことは明白である。そうして一定の存在現實態の代表者等は、彼等から見て根本的には決して實現され得ないと思はれる總ての表象を、ウトビーと稱するのである。但し存在超越的表象の中には根本的に又決して實現し得られないと思はれるものもある。そうしてかゝる存在超越的表象は絶対的ウトビーと稱し得られる。併し、社會學或は社會哲學に於て問題となるのは、つまり只一定の、既に現實に存在する階段から見て、實現し得られないと思はれるウトビー、即ち單なる相對的ウトビーと稱せらる可きものだけである。

併し社會學或は社會哲學に於て問題とするウトビーは、右に述べしが如き意味にて單なる相對的ウトビーと稱せらる可きものであるとしても、尙ほウトビーとイデオロギーとを區別することが困難なる場合は少なくない。例へば現在に於て何が勃興しつつある階級のウトビーにして、又何が支配階級のイデオロギーであるかを見定めることは甚だ困難である。併し過去に目を投じて考察すると、何がイデオロギーとして、又何がウトビーとして認めらる可きかを決定する爲めに、かなり信頼し得られる標準が発見される。要するにイデオロギーとウトビーとを判別する標準は實現或は現實化 (Verwirklichung) である。既成の生活秩序、或は實現の爲めに奮闘されて居る生活秩序の上に、之を隱蔽するものとして浮動する觀念或は理念はイデオロギーであつて、之に對して次に生成せる生活秩序に於て充實的に實現し得られた觀念或は理念は、相對的ウトビーであるである。

マンハイムは先づウトビーとイデオロギーとの區別を、大體上右に述べしが如くに決定し、夫れよりウトビー概念の本質を更に詳しく規定せんと企だてゝ居る。彼の論ずる處によると、總て歴史的社會的存在に對して、何日か之を變化する様に作用する存在超越的諸表象は、ウトビーと認めらる可きである。そうして此處に特にウトビーの近世的生成に就て考察するに當つて、先づ存在超越的表象が始めて能動的となれる點、即ち現實態を變化する勢力となれる點を発見することが肝要である。尙ほ此處では意識の存在超越的諸要素中の何れのものが、當面に此の能動作用を營んだかを究明することが肝要である。是れウトビー的或は存在破壊的機能を營むものは、常に同じ

「力」、「實體」、「表象」ではないからである。つまり意識に於けるウトビー的なるものは、實體變化及び形態變化を受け、與へられたる「存在」は絶へず當面に於て種々相異なる存在超越的諸因素によりて、破壊されるのである。

ウトビーの此の實體變化及び形態變化は、社會的に拘束されない空間に於て行はれるものでなく、本來一定の歴史的階段に、又其處では一定の社會層に拘束されて居る。かくてウトビーの諸形式と存在を變化する社會層との間に、密接な相關々係が存立する。そうして夫れが爲めにウトビーの變化は社會學の一主題となるのである。併し吾人は只ウトビーの社會的に拘束されたる當面の形式が、形態變化を受けると云ふ事態を取扱ふ限り、まだウトビー意識其物の變化を了解することは出来ない。そうして吾人は只、ウトビーの當面の形態が當面の意識の一の生きた内容であるだけでなく、少なくとも傾向に於て意識を其の全範圍に於て捕へる時にのみ、ウトビー的意識が存立すると云ひ得るのである。換言すれば只ウトビー的要素が右の意味にて、夫れによりて支配される意識を傾向に於て完全に充たし、體驗形式、活動形式、考察の仕方或は見方が夫れによりて組織されて居る時にのみ、吾人は常にウトビーの諸形式のみならず、更にウトビー的意識の諸形態及び諸階段を認め得るのである。

具體的意識の最本質的形成原理は常に其の意識のウトビー層に於て見出さる可く、意識のウトビー的中心から特殊的に形成されたる作用意志及び見方が生れ、其等の作用意志及び見方は相互に制約し、歴史的時代體驗の當面の形態を鑄造するので、かくて吾人は結局一の意識の構造の當面の組織に對する最も重要な徴候は、其の意識に内着する歴史的時代體驗の此の形態であると云ひ得るのである。當面の歴史的時代體驗の構造に於て、當面の歴史的時代體驗は當面の意識のウトビー的中心と最も密接に聯結して居ること、夫れはウトビー的要素の當面の形態の直接放射であることが、最も明白に現はれて居る。一の具體的團體、一の社會層が如何に歴史的時代を調節するかは、其の團體、其の社會層のウトビーに依つて定まる。かくて一の意識の最深構造は、吾人が其の意識の時代形象を夫れの希望憧憬及び意味目標等から了解する場合ほど明瞭には、何れの場合に於ても把握され得ない。尙ほかゝる意味調節は本來歴史的事象の把握及び解釋に於ける最原本的なものである。そうして、近世心理學は吾人は形態を諸要素よりもより早く保有し、本來先づ形態から要素を把握するものなるを教へて居るが、此の事は歴史的了解到に於ても同様である。歴史的了解到に於ても吾人は事象の諸要素よりも早く、夫れを調節

する意味全體として歴史的時代體驗を有し、其の意味全體から本來始めて其の歴史的時代體驗の全經過及び夫れに於ける吾人の場所を了解するのである。

マンハイムは右に述べし如くに歴史的時代體驗の中心の意義を認め、夫れより夫れ夫れの時代のウトビーと歴史的時代見方との間の聯結を究明せんが爲めに、ウトビーの意識の諸形態及び諸階段を研究して居るのであるが、彼は先づ其等の諸形態及び諸階段の論理的性質に就て左の如く論述して居る。

吾々がウトビーの意識の一定の諸形態及び諸階段と云ふ時には、個々の個人に於て生動して居たがまゝの、具體的に見出し得られる意識諸構造を意味するのである。吾々は此處にカントの云ふ意識一般の如き純粹に構想されたる統一體を意味するのでも、亦ヘーゲの云ふ精神の如き、云はゞ個人の具體的意識の上に存立すると云はれる一の形而上學的本體を意味するのでもなく、個々の個人に於て證示されることの出來た、具體的に見出し得られる意識諸構造を意味するのである。此際吾々は絶えず具體的思惟、行動、感情、及び具體的人間典型に於ける其等のものゝ内部的聯結を考へる。かくてウトビーの意識の純粹諸典型及び諸階段は、只夫れが理想典型として解される以上に於てのみ、構想的である。如何なる個人も何れかの歴史的社會的意識典型の純粹實現であつたのでない。寧ろ具體的各個人に於て、意識構造の一定の典型の一定の諸要素が、屢々他の典型と混交して作用したのである。

されば吾々が此處に列舉せんとする、歴史的社會的階段構造に於て表現されるウトビーの意識の理想諸典型は、決して認識論的或は形而上學的に考へられたる構想として解する可きものでなく、方法的に考へられたる構想として解する可きである。そうして此等の構想はマックス・ウェバーの云ふ理想典型の意味にて、只既に生成せる及び現存する多様性を把握する爲めのみ用ひられるのであるが、吾々は此處に更に只心理學的事實のみならず、夫れに於て歴史的に展開する又完成する「諸構造」を、夫れの純粹性に於て把握することをも企てるのである。

マンハイムは先づ右に述べし如くに、彼が區別せんとするウトビーの意識の諸形態及び諸階段の論理的性質を論定したる後、ウトビーの意識の形態變化、及び夫れの近世的發達に於ける諸階段

を稍々詳しく論述して居るのであるが、彼は先づウトビーの意識の第一形態として、再洗禮教徒の躁宴的千年至福説(der orgiastische Chiliasmus der Wiedertäufer)、第二形態として自由主義的人道主義的理念、第三形態として保守主義的理念、第四形態として社會主義的共產主義的ウトビーを論究して居る。

千年至福説或は千年王國説ミューンツェルの唱へ出した千年至福説に於て、從來空中に浮動せる或は彼岸に集中する特殊な重壓を以て社會的行動を充たすに至つた。此處に躁宴恍惚的エネルギー、大歡喜力は世間的性質を賦與され、世界から脱却せんとする緊張は世界を爆發する物となつた。此の近世的ウトビーの最極端形態は一の全く特殊な實體、一の全く特殊な材料から作られたものにして、夫れは地下的社會層の精神的及び肉體的昂憤に對應し、無作法に野性的に物質的であると同時に、非常に最高度に精神的なものであつた。千年至福説信者の體驗の現實な、恐らくは唯一の直接特徴は、即ち絶對的現在(das absolute Gegenwärtigsein, das absolute Präsenz)である。千年王國信者の絶對的體驗にありては、現在的なるものは是れまで内部的であつたものが今や外部に打ち出し、外界を一撃で忽然轉變させる侵入地點となつて居る。かくて千年至福説は本來革命的なものであつた。

今ウトビーとしての千年至福説或は千年王國説の本質は上に述べしが如きものであるとすると、まさしく是れと正反對の本質を發揮して居るものは、合理主義的ウトビーである。合理的ウトビーの非感性的、超感性的特質は、感性的に覺醒して居る千年至福信者の完全なる現在の待ち焦れと直接に衝突して居る。そうして合理的ウトビーとしての自由主義的人道主義的ウトビーは、千年至福的意識の最初の反對者として現はれた。

自由主義的人道主義的ウトビー

自由主義的人道主義的ウトビーも亦現存の社會秩序に反對して現はれたものである。夫れは夫れの充當的形態に於ては又、惡現實態に一の正當な合理的對像を對立させるものである。併し自由主義的人道主義的ウトビーは、右の對像から各任意的時間點に於て世界への突出を圖る爲めに之を必要とするのではなく、只人々が生起し來る事件に、依て以て豫め熟慮的に對抗する尺度を備へるが爲めにのみ、之を必要とするのである。かくて自由主義的人道主義的意識のウトビーは「理念」である。併し物の原型としての靜的造形的充

實性に於ての希臘的プラトンの理念ではなく、此岸的生成に對する單なる規制者として、即ち無限に遠い處へ推しやられ、其處から吾人を動かす形式的な方向規定者としての理念である。

自由主義的人道主義的ウトビーは千年至福説とは正反對に、文化肯定及び人間的存在の倫理化を特質とするもの、本來批判を本質とするものにして、決して生産的破壊を本質となすものでない。夫れは此處に今生成するものとの總ての橋を徹去せず、當面の生成の上に精神的目標、活動させる理念の其の王國を浮動させて居る。千年至福信者にありては精神或は精靈は、吾人、吾人から語る其の精神或は精靈であるが、人道主義者にありては、精神或は精靈は吾人の情意の中にとり入れられて吾人を精神化する處の、吾人の上に浮動する其の「第二王國」である。そうして理想主義或は觀念論哲學は此の自由主義的人道主義的ウトビー意識の所産として生まれ、又此の意識を充分に發揮せるものである。

此のウトビー意識は千年至福説と次に述べる保守主義的理念との兩者と戦ふ爲めに生まれ、今もやはり兩者と戦ふて居る。此のウトビー意識はあるがまゝの存在に入り込む爲めには、あまりに規範的であり過ぎた。夫れはゾルレンから自分特有の世界を築き上げ、あまりに高尚になり過ぎて肉體性の感覺、自然との關係を全く失なふた。

自由主義的啓蒙理念の最も深奥なる衝動力は、絶えず無限な地平線へ向けられて居る約束を與へて、吾人の想像力を昂憤させること、及び絶えず自由な意志に訴へて、無制約性體驗 (Unbedingtheitslebnis) を覺醒させることに存するのであるが、之れに對して吾々は保守主義的意識の特有性は、まさしく無制約性體驗に反抗し、自由主義に意識的に反對して、被制約性意識 (Bedingtheitsbewusstsein) に莊重な調子を賦與することに存すると云ひ得る。

保守主義的理念

保守的意識は夫れ自身に於て本來理論的に基礎附けられて居るものでない。是れ人間は周圍の現實狀態と合致して居る限り之を理論的反省の對象とはしないからである。そうして存在のかゝる階段にありては、人間は周圍の總てのものを世界秩序に屬するとして、かくて問題とならない或物として感ずる傾向を有する。されば保守的意識は夫れ自身に於てはウトビーを有せず、理想の場合には夫れの構造に従ふて、夫れが支配する現實態と完全に合致する。只反對社會層の反抗運動及び夫れの破壊傾向が、云はゞ外から保守的意識をして自己の存在支配を疑はしめ、そうして己れ自身に對して歴史哲學的反省を加へざるを得ざらしめ、又自己の方向付けと防衛の爲めに反對社會層のウトビーに對立する、自己特有のウトビーを作らざるを得ざらしめるのである。

自由主義的ウトビーは千年至福説の大歡喜に比すると、「此處及び今」により多く接近して居るのであるが、保守的意識に

ありては此の接近過程は既に完成されて居るので、ウトビーは本來既に存在の中に埋れて居るのである。云ふまでもなく、保守的意識は「此處及び今」を即ち存在を、自由主義の如く惡現實態と見るのでなく、意味充實の運載者と見るのである。そうして保守的意識にありては、ウトビーを作ると云ふことは、合理的に考へ出すことを意味するのでなく、存在の中に埋れて居る處の、或は吾人及び吾人の過去の中に客觀化されて居る處の、力及び理念を内部的に擱むか、又は内部的形式として形態學的に諦觀するかを意味するのである。

ウトビーの保守主義的形態、現實態中に沈める理念の思想は、只並存する他のウトビーとの闘争からのみ、充分に了解し得られるのである。そうして夫れの直接の闘争者は、合理主義的に構成されたる自由主義的ウトビーであるから、吾人は保守主義的ウトビーの本質を自由主義的ウトビーと對照することによりて、之を最もよく把握することが出来るのである。要するに自由主義的意識にありては Solun が強く體驗されて居るが、保守主義的意識にありては Sein が強く體驗されて居る。換言すればさきに述べし如く、前者にありては無制約性體驗が常に支配し、後者にありては被制約性體驗が常に支配して居るのである。

社會主義的共產主義的ウトビー

社會主義的共產主義的思維及び體驗も亦夫れのウトビー的構造に於ては、夫れの反對者と對立させることによりて、一番早く了解し得られる。社會主義は先づはれると考へられて居る。併し其の遠い將來は自由主義よりも遙かに具體的に見定められて居る。夫れはつまり資本主義的文化没落の時代と考へられて居る。尙ほ社會主義は抽象的善意向を有し、統制され難き遠い時代に於て實現される自由の世界を要請するだけでは満足さる可きでなく、かゝる世界が一般的に依て以て完成され得る現實的條件をも認識せねばならぬと考へる。社會主義は更に此の目標に吾人を導く途を發見することが肝要であると認め、現在の過程に於ける諸勢力(夫れの内部的ダイナミクが吾人によりて統制されて實現される理念に、一步一步吾人を導く諸勢力)を探究せんとするのである。尙ほ保守主義は自由主義理念を單なる意見として蔑視するだけに止まるが、社會主義はイデオロギー研究に於て、徹底的な批判的方法、即ち自由主義ウトビーを存在に結び附けて根本的に破壊せんとする方法を遂行せんとするのである。

保守主義と比較して社會主義に於て注目すべきは、保守主義的被制約性意識が社會主義に於て、進歩的な、世界を變化せんとするウトビー中に特異な仕方にて同化されて居ることである。要するに保守主義意識は被制約性意識を現在肯定と強制的に結び附けて居るが、社會主義にありては前進的社會力は革命的活動の自發的牽制と結び附けられて居るのである。但し

社會主義に於ける右の特性は、千年至福説的原理を大に強調する極端な無政府主義が、社會主義から排斥された後に確立されたものである。

社會主義は右に述べしが如き特異な仕方にてあるが、とにかく保守主義的意識の被制約性體驗をとり入れたことによりて、單に形式的な超越的規制者として樹立されて居た自由主義の理念は、社會主義に於ては漸次に具體化され、現實態に即して絶へず自から修正する「傾向」として、「現實的」生成と相互的生活を營むに至つた。

併し夫れによりて社會主義にありては、自由決斷の範圍は狭められ、常に過去が生成を規定するのみならず、經濟的社會的狀態も亦可能的生成を制約するものとなつて居る。そうして吾人を押し進める志向は、浮動する衝動から、任意な「此處及び今」に侵入することではなく、寧ろ行動に都合よき地點を構造的組織の中に確定することを意味するものである。かくて夫れのダイナミクが自分の方針に動いて居る諸勢力を意識的に強め、之れに反して一切の反抗する勢力を、自分の方針に曲げ或は麻痺させることが、政治家の任務となつて居る。

以上其の大要を述べ來りしマンハイムのウトピー概念論及びウトピー意識論は、私の社會理念の論理的性質を究明する爲めに、直接に甚だ重要な意義を有するものにして、隨ふて私は先づ今日のイデオロギー概念の批判によりて、私の社會理念の論理的本質を究明したる後、更に之を彼のウトピー論を中心とし、他の諸家の説を合せて批判しつゝ、究明せんとするのであるが、尙ほそれに先だち注意して置きたいのは、現世紀に入りてより佛蘭西に於て革命的サンディカリズムが勃興するに當つて、其の理論的基礎を確立する爲めに、ソレルがベルグソンの生命哲學を巧みに應用して立てたユトピー(utopie)とミト(神話 mythe)との區別である。此の區別は當時佛蘭西の學界に於て大に論議されたに拘らず、其の後殆んど忘れられて居るが、併し今日獨逸に於て盛んに論議されて來たイデオロギーとウトピー問題に於ては、改めて注目すべき價值あると思はれる。

七、ソレルの神話論 (La théorie des mythes)

今ソレルの社會的神話論の始源及び發達を詳しく研究する爲めには、吾々は彼の歴史的諸著作に溯つて行かねばならぬ¹⁾。併し此處では最早詳しく述べる暇はないから、只「暴行論」及び「進歩の幻想」²⁾に就て、其の骨髓を極簡単に述べるに止める。

ソレルの論ずる處によれば、社會的大運動に参加する人々は、彼等の直接の行動を戰鬪の形象に於て表はし、夫れに於て自から勝利を祝賀して居る。そうしてかゝる形象が即ち神話と稱せらる可きである。歴史上に於けるかゝる神話の最とも顯著なる實例は、初代の基督教、宗教改革、千七百八十九年の佛蘭西大革命、第十九世紀の始めの戰鬪的カトリック教等によりて與へられて居るが、今日にありてはマルクスの大破滅的革命、及び革命的サンディカリズムの總同盟罷業が、即ちかゝる神話の最とも重大なる實例である。

かゝる神話の根本的意義は本來其の運動性、衝動性に存するので、吾人は之を簡単にユトビーとして始末附けることは出来ない。蓋しユトビーは本來知力的仕事の生産物であるが、神話は本來意志の生産物であるからである。ユトビーは事實を観察し、考察したる後、存在する諸社會が包有する善惡を測定する爲めに、其等の社會を依て以て比較し得る模型を設定せんとする理論家の作れるものである。ユトビーはつまり想像的であるが、しかも法律家が依て以て推論し得るに充分なる類似を、現實なる諸制度に於て有する制度の組み立てである。ユトビーはつまり夫れの一定の諸部分が次の法律に於て實現し得られる様、切り取り得られる處の、證明し得られる構想である。

ユトビーは與へられたる狀態の諸特徴を想像に於て大に高め、吾人をして現存秩序の改良に押し進めるものであるが、之れに反して神話は常に事物の完全に新しき一狀態即ち革命に吾人を押しやるものである。ユトビーは理性の產物として、吾人は之れに抵抗し得るが、神話は意志の產物或は生命の產物として、不可抗的なものである。要するに總同盟罷業及び大破滅的革命の神話は、今日の勞働者の深い精神的生活に於て宗教的信仰の地位を占め、分割的にではなく、其の儘に實現されんことを欲するものである。そうして其の結果が如何にある可きかに就ては、全く頓着しないものである。蓋しベルグソン

- 1) Georges Sorel, Le procès de Socrate, 1889.
La ruine du monde antique, 1901.
Le système historique de Renan, 1906.
- 2) Georges Sorel, Réflexion sur la violence, 1908.
Les illusions du progrès, 1908.

哲學の教へる如く、過去の諸斷片を集めて將來を豫想することは不可能であつて、生は飛躍するものであるからである。

ソレルは以上述べし如くに、ミト（神話）をユトピーから區別し、後者は知力或は理性の產物として分割的に實現し得られるものであるに對して、前者は意志或は生命の產物として、其儘に實現されんことを要求するものとして、其の特殊な意義を認めんとするのである。そうしてさきに述べしマンハイムのウトピー諸典型と比較すると、ソレルの神話と稱するものは大體上マンハイムがウトピーの第一典型と稱するものに、又ソレルのユトピーと稱するものは、大體上マンハイムが其の他の諸典型と稱するものに當ると思はれる。然らばソレルの如く社會的神話をユトピーから根本的に區別するのが正當であるか、又はマンハイムの如く神話をユトピーの一典型と見るのが正當であるか。

却說私は以上述べ來れるイデオロギー概念、ウトピー概念、及ミートス概念等を批判的に考察しつゝ、私の社會理念の論理的本質を究明せんとするのである。そうして始めは本論文の最後の一節として、此の究明を遂行するもつもりであつたが、本論文が豫定外に長くなつたから、本雜誌編輯の都合上、「社會理念の論理的本質」と題する別論文として、此の究明を遂行したいと思ふ。（完）